

いわゆる「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文に関する一考察

一日英語の他動性対照研究の基礎調査として—

小 堂 俊 孝

A Study on the Japanese Structure “kiri mashita ga, kire masen deshita” —A Basic Research for a Contrastive Study on Transitivity in English and Japanese—

Toshitaka KODOH

(Received on October 31, 1992)

In Japanese we have specific structures like “kiri mashita ga, kire masen deshita”, whose English counterparts are not acceptable. The Japanese ones indeed looks contradictory from the viewpoint of semantics, but they are acceptable.

The purpose of this paper is to generalize the rules on the structures of the type in order to have some basic data for a contrastive study on transitivity in English and Japanese. In this thesis they have been examined from some aspects, for example, what kind of subjects/objects they have, and what kind of verbs can be used.

The result is that if the first half of the structure like “kiri mashita ga” has a goal-oriented word, whatever element it is, the structure is unacceptable. As for verbs, they should be activity verbs with the feature [+ intention].

1. はじめに

日英語動詞の他動性の違いが(1)の容認性に影響することは周知の事実である。

- (1) a. * John persuaded Mary to come, but she didn't come.
- b. ジョンハメアリーニクルヨウニ説得シタガ、メアリーハ来ナカッタ。
 (Ikegami (1991: 104))
- c. * I called up my teacher, but the line was busy.
- d. 先生ニ電話ヲカケタガ、話シ中ダッタ。
 (Hofmann & Kageyama (1987: 107))

persuade は主語の意図が達成されたことを含意するが、「説得スル」は意図の達成に関しては中立であるとされている。call up と「電話ヲカケル」の違いも同様である。このような日英語動詞の他動性の違

いに関して、池上 (1989: 48) は「典型的には、ある結果を意図してなされる行為を表わす動詞が英語と日本語に一応対比するような形で存在していて、しかもその対応する英語と日本語の動詞の間で結果の達成と未達成という点に関して両者の間で意味的なずれが生じる場合、常に英語動詞の方は達成を意味し、日本語動詞の方は達成・未達成を不確定にしておくという形で相違がみられ、その逆は見られないという事実がある。」としている。つまり、動詞の他動性に関しては常に英語動詞の方が高いというのである¹⁾。

日本語動詞の他動性の低さは同一動詞を否定的に反復した、いわゆる「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文を容認可能にしている (cf. 小田 (1991))。

- (2) a. リンゴヲ切りマシタガ、切レマセンデシタ。
- b. 丸太ヲ燃ヤシマシタガ、燃エマセンデシタ。
- c. ガンバッテ走りマシタガ、走レマセンデシタ。
- d. 雨戸ヲ閉メマシタガ、閉マリマセンデシタ。

e. 洗濯物ヲ乾カシマシタガ、乾キマセンデシタ。

(2)に相当する英語構文はすべて不適格となる。さて、本論では日本語に特徴的な「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文についていくつかの観点から考察し、なんらかの規則・制約を求めようと試み、日英語動詞の対照研究を進める上での出発点としたい。

2. 考 察

2・1 主語の特徴に関して

ここでは主語の意味的な特徴に関して考察してみたい。次の文を見てみよう。

- (3)a. 病気が治り、久シブリニタチマシタガ、タデマセンデシタ。
- b. *公園ノ側ニ、家ガタチマシタガ、タチマセンデシタ。 ((b)は小田(1991: 8))
- (4)a. 急イデ窓ヲ閉メマシタガ、閉マリマセンデシタ。
- b. *強い風ガ窓ヲ閉メマシタガ、閉マリマセンデシタ。

(3-4 a)では主語が話者であるという解釈が成り立つ。一方、(3 b)では主語が「家」、(4 b)では「強い風」である。小田(1991)によると、動詞は意志を備えたものでなければならない。よって、必然的に主語は「意志を持てるもの」ということになり、(3-4 a)が容認され、(3-4 b)が容認されないという判断と合致する。

では、「意志を持てるもの」とはどのようなものを指すのであろうか。「人」がその中に含まれるのは(3-4 a)からも明らかである。次の文を見てみよう。

- (5)a. 私ハ走りマシタガ、走レマセンデシタ。
- b. ?子犬ガ走りマシタガ、走レマセンデシタ。
- c. *列車ハ走りマシタガ、走レマセンデシタ。
- (6)a. ソノ子ハ穴ヲ掘リマシタガ、掘レマセンデシタ。
- b. ?モグラハ穴ヲ掘リマシタガ、掘レマセンデシタ。
- c. *鉄砲水ガ穴ヲ掘リマシタガ、掘レマセンデシタ。
- (7)a. トランペットヲ吹キマシタガ、吹ケマセンデシタ。
- b. */?クジラハ潮ヲ吹キマシタガ、吹ケマセンデシタ。

シタ。

c. *強い風ガ吹キマシタガ、吹ケマセンデシタ。

(a)の主語は〈人〉、(b)の主語は〈動物〉、(c)では〈無生物〉である。上の結果は、主語が〈人〉の場合は容認され、〈無生物〉の場合は非容認文であるという(3-4)の結果と矛盾していない。さて、(b)については(c)ほど文法性が低いわけではないが、完全に容認されてはいない。この理由は、動物・生物の主語が意志を持つということは人間の場合よりも特殊な脈略を想像しなければならないからだと考えられる。ちなみに、〈動物〉主語を擬人化すれば容認されやすくなる。

- (8)a. モグラノ太郎ハ一生懸命穴ヲ掘リマシタガ、掘レマセンデシタ。
- b. クジラノ花子ハ懸命ニ潮ヲ吹キマシタガ、吹ケマセンデシタ。

以上の結果から、主語は意志を持てるものでなければならず、それゆえ原則として[+human]の素性を備えていなければならないことになる。

2・2 動詞の特徴に関して

小田(1985)は動詞の特徴として意志の含意を挙げている。(2)で使用されている動詞はすべて意志が含意されている。しかしながら、すべての意志動詞がこの構文に使用できるであろうか。次の例文を見てみよう。

- (9)a. *太郎ハ大企業ニ就職シマシタガ、デキマセンデシタ。
- b. *太郎ハ憧レノ花子ト婚約シマシタガ、デキマセンデシタ。

(9)は容認されない。しかし、「就職スル」・「婚約スル」は意志が含意されていないだろうか。(10)を見てみよう。

- (10)a. 太郎ガ大企業に就職シタノデ、次郎モ負ジトソウシタ。
- b. 太郎ト花子ガ婚約シタノデ、次郎ト良子モスグニソウシタ。

(10)は動詞句が代用された表現「ソウスル」を含んでいるが、この表現は意志動詞のみ代用可能である。

無意志動詞の場合は非文となる。

- (11) a. *太郎が気絶スルト次郎モソウシタ。
(柴谷 et al. (1992 : 292))

(10)(11)から「就職スル」・「婚約スル」は意志動詞と考えられる。

さらに、意志動詞と無意志動詞の違いは、前者が命令・禁止、依頼、勧誘などの表現に使われ、後者は使われないということである (cf. 益岡&田窪 (1989))。しかし(9)の動詞は次のような表現が可能である。

- (12) a. 大企業ニ就職シナサイ。(命令)
b. 花子トハ婚約スルナ。(禁止)

(12)は「就職スル」・「婚約スル」が意志動詞としての資格があることを証明することになる。

よって、小田 (1991) のいう意志動詞か否かという点から(2)が容認され、(9)が容認されないということの説明は不可能になり、それぞれの容認性の説明を別の点に求めなければならない。

Ikegami (1985) や Hoffman & Kageyama (1987) では Vendler (1967) の分類を用い、動詞の他動性に関して次のような分類を行なっている。それによると動詞が動作・行動の終点 [F (inish)] を含意しているか否かで以下のように3種類に分類される。

- | (13) CHARACTERISTICS | VERB TYPE |
|--------------------------|---------------------------------|
| (a) no particular [F] | Stative |
| (b) [F] included in verb | Accomplishment
(Achievement) |
| (c) [F] not in verb | Activity |

Stative Verb には [F] はなく、Accomplishment Verb はそれ自体が [F] を含んでいる。またこの種の動詞の一部として考えられる Achievement Verb は目的語が不定のものでも行為が達成されたことを含意する。Activity Verb はそれ自体には [F] は含まれていないが、文脈によって [F] を含意するかが決定される動詞である。

さて、この分類に(2)(9)の動詞をあてはめて考えてみよう。

- (14) a. リンゴヲ切ッタ。
b. リンゴヲ切ッタガ、切レナカッタ。

(14 a) は行為達成を含意している。しかしながら、否定できないはずの行為達成を否定している (14 b) も文法的である。このことから「切ル」は過去時制により行為達成を意味するが、(14 b) の「リンゴヲ切ッタ」は逆接接続詞「ガ」及び否定辞「ナイ」によって行為達成の意味が中和されてしまうと考えられる。よって、動詞「切ル」の他動性は動詞の性質以外の環境によって決定され、(13)の分類では Activity Verb に属すると考えられる。同様に(2)での他の動詞「燃ヤス」・「走ル」・「閉メル」・「乾カス」も Activity Verb と考えられる。

次に(9)の動詞を考察してみよう。

- (15) a. 大企業ニ就職シタ。
b. *大企業ニ就職シタガ、デキナカッタ。

(15 a) は行為達成を含意しており、(15 b) は (14 b) と同じように逆接接続詞と否定辞があるものの非文となっている。このことは (15 b) の「就職シタ」の行為達成が中和されていないと考えられる。つまり、動詞「就職スル」の他動性は他の環境によって左右されず、(13)の分類では Accomplishment/Achievement Verb に属すると考えられる。(9)の他の動詞についても同じことが言えよう。

よって、「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文に使われる動詞の特徴は、意志動詞であり、終点を含意しない動詞、すなわち、Activity Verb に限られると考えられる²⁾。

2・3 動詞複合要素に関して

このセクションでは「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文の動詞に複合的要素を加えることによって容認性に違いが生じるのかどうか、また違いが生じるとすればどのような理由によるのかを考察していく。

複合的要素には次のようなものがある (cf. 益岡&田窪 (1989))³⁾。

- (16) a. アスペクトに関するもの
(ex) ハジマル・シテシマウ
b. 授受に関するもの
(ex) シテモラウ
c. 完遂に関するもの
(ex) ツクス
d. その他
(ex) アウ・ナオス・カエス

まず、アスペクトに関する要素を含んだ複合動詞の場合を見ていこう。

- (17) a. リンゴヲ切ッタガ、切レナカッタ。
 b. *リンゴヲ切ッテシマッタガ、切レナカッタ。
 (18) a. 駅マデ走ッタガ、走レナカッタ。
 b. */?? 駅マデ走ッテイッタガ、走レナカッタ。
 (19) a. 木ヲ切ッタガ、切レナカッタ。
 b. *木ヲ切り終エタガ、切レナカッタ。

(17-19b)は容認されない。しかしアスペクトに関する複合動詞がある場合、すべて容認性が低くなるというわけではないようだ。次の文を見てみよう。

- (20) a. 丸太ヲ燃ヤシタガ、燃エナカッタ。
 b. 丸太ヲ燃ヤシ始メタガ、燃エナカッタ。
 (21) a. ソバヲ食ベタガ、食ベラレナカッタ。
 b. ソバヲ食ベ続ケタガ、食ベラレナカッタ。

(20-21b)は(17-19b)と同じように複合動詞があるにもかかわらず容認されている。

(17-21b)の容認性の違いは、それぞれに使われている複合要素によるものと考えられるが、どのような違いがあるのか。容認されなかった文の複合要素を(22)、容認可能であった文の複合要素を(23)にまとめてみよう。

- (22) a. テシマウ
 b. テイク
 c. 終エル
 (23) a. ハジメル
 b. 続ケル

(22)はある行為を遂行したというニュアンスが含まれている。一方、(23)は行為の起点・継続性を表わしているものである。換言すれば、(22)の要素は終点指向(goal-oriented)、(23)のそれは行為指向(action-oriented)である。前のセクションでは[F]を含意した動詞が「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文を非文にする要因であった。同じようにここではgoal-orientedを含意した要素が非文の要因と考えられる。

次に授受に関する複合要素のある動詞の場合を見てみよう。

- (24) a. 本ヲ読ンダガ、読メナカッタ。

- b. *本ヲ読ンデモラッタガ、読メナカッタ。
 (25) a. リンゴヲ切ッタガ、切レナカッタ。
 b. *リンゴヲ切ッテモラッタガ、切レナカッタ。

ここでも複合要素を含んだ文は容認されない。よって、授受に関する複合要素もgoal-orientedであると言えよう。

三番目に完遂に関する複合要素を見ていこう。

- (26) a. 学校マデ走ッタガ、走レナカッタ。
 b. *学校マデ走り切ッタガ、走レナカッタ。
 (27) a. アノ菓子ヲ食ベタガ、食ベラレナカッタ。
 b. *アノ菓子ヲ食ベツクシタガ、食ベラレナカッタ。

(26-27b)は容認されず、完遂の複合要素「シツクス」「シキル」もまたgoal-orientedであると考えられる。

最後にその他の複合要素のある構文を挙げておこう。

- (28) a. 犬小屋ヲ作ッタガ、作レナカッタ。
 b. 犬小屋ヲ作り直シタガ、作レナカッタ。
 (29) a. ボールヲ投ゲタガ、投ゲラレナカッタ。
 b. ボールヲ投ゲ返シタガ、投ゲラレナカッタ。

「ナオス」「カエス」といった要素は行為の結果ではなく過程に中心が置かれていると判断できる。すなわち、action-orientedであると言えよう。よって(28-29)の文はすべて容認されている。

以上の結果をまとめると、「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文の前半部にgoal-orientedの複合要素を持つ動詞がある場合には容認されないと言えよう。

2・4 副詞句に関して

このセクションでは「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文に副詞句が共起している場合の容認性について考察していく。益岡&田窪(1990)によると副詞には8種類あるが、ここで問題となる副詞は「量」、「程度」そして「様態」である。

まず、量の副詞に関して見ていく。

- (30) a. リンゴヲ食ベタガ、食ベラレナカッタ。
 b. *リンゴヲ全部食ベタガ、食ベラレナカッタ。
 (31) a. 皿ヲ洗ッタガ、洗エナカッタ。

b. *皿ヲ全部洗ッタガ、洗エナカッタ。

(32) a. コノ本ヲ読ンダガ、読メナカッタ。

b. ??コノ本ヲ全部読ンダガ、読メナカッタ。

それぞれ(a)が容認されていることから動詞は Activity Verb であると考えられる。しかしながら、「全部」がある場合には否定が不可能になり、非文となってしまう。次の例でも同じことが言えよう。

(33) a. 樹ヲ倒シタガ、倒レナカッタ。

b. *樹ヲ完全ニ倒シタガ、倒レナカッタ。

「倒ス」は Activity Verb であるが、「完全ニ倒ス」では非文となる。

次に量の限定を表わす副詞がある文を見ていこう。

(34) a. 太郎ハ走ッタガ、走レナカッタ。

b. ? 太郎ハ100メートル走ッタガ、走レナカッタ。

(35) a. テーブルノリンゴヲ食ベタガ、食ベラレナカッタ。

b. ?? テーブルノリンゴヲ3個食ベタガ、食ベラレナカッタ。

(34-35 a) が容認され、(34-35 b) は容認性が低い。このことは限定を表わす副詞のある表現「100メートル走ッタ」、「3個食ベタ」の他動性が高くなっているといえよう。数量を表わすことによって、その数量全てに行為が及んだことを意味するようになる。よって、動詞の他動性が強くなり、否定することが困難になると考えられる。この点に関しては英語でも同じことが言えるという指摘が Ikegami (1985: 298) によってなされている。

(36) a. John dried dishes for Mary, but he didn't dry all the dishes.

b. *John dried the dishes for Mary, but he didn't dry all the dishes.

(37) a. John cleared snow from the path, but he didn't clear all the snow.

b. *John cleared the snow from the path, but he didn't clear all the snow.

定冠詞は包括性を持っている。the dishes はその場に存在するすべての dishes を対象物として指示することになる。これは日本語の「全部」などの <all>

を含意する副詞句に相当すると考えられる。前半部に the dishes, the snow のある (36-37 b) が非文であり、定冠詞のない dishes, snow がある (36-37 a) が文法的であるということは (30-35) で見てきた結果とパラレルな関係にある。

以上の結果から数量的に <all> を含意する要素が「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文の前半部に存在する場合には、そこに記述されている行為が完遂されたことを含意するため、後半部での否定が認められず、非文になるのである。

さて数量を表わす副詞が <all> 以外のものを含意する場合はどうであろうか。

(38) a. ?/レリンゴヲホトンド食ベタガ、食ベラレナカッタ。

b. リンゴヲ半分食ベタガ、食ベラレナカッタ。

c. リンゴヲ少し食ベタガ、食ベラレナカッタ。

(39) a. ?/レコノ本ヲホトンド読ンダガ、読メナカッタ。

b. コノ本ヲ半分読ンダガ、読メナカッタ。

c. コノ本ヲ少し読ンダガ、読メナカッタ。

(40) a. ? 丸太ヲホトンド燃ヤシタガ、燃エナカッタ。

b. 丸太ヲ半分燃ヤシタガ、燃エナカッタ。

c. 丸太ヲ少し燃ヤシタガ、燃エナカッタ。

(38-40 a) では副詞「ホトンド」、(38-40 b) では「半分」、(38-40 c) では「少し」が生起している。(30-32 b) に比べるとすべて容認性が高く非文は見当らない。この理由として考えられるのは「全部」を使った場合には行為がすべての対象物に及んでしまい、その否定が不可能であったが、(38-40) での副詞では行為の及んでいない対象物がまだ存在し、そのため行為の否定が可能だと考えられるからである。

さて、(38-40) の中では(a)がやや容認性が低い。この理由として、「ホトンド」の言及する対象の方が「半分」や「少し」のそれよりも多く、それゆえ否定可能な部分が他より少ないために、容認性が低下すると考えられる。しかしながら、それがまったくの非文ではないというのはやはり否定可能な部分を残しているからであろう。一方、「半分」・「少し」は否定可能な部分を十分に残しているため、文の後半部に否定語が生じても、「全部ハ・・・ナイ」という解釈が生じなんら矛盾する内容にはならないのだろう。

さて、次に程度・様態の副詞が生じた場合はど

うだろうか。

- (41) a. 走ッタケレド、走レナカッタ。
 b. *速ク走ッタケレド、走レナカッタ。
 (42) a. 寝マシタガ、寝ラレマセンデシタ。
 b. *グッスリ寝マシタガ、寝ラレマセンデシタ。
 (43) a. 町ノ特産品ヲ売リマシタガ、売レマセンデシタ。
 b. *町ノ間産品ヲヨク売リマシタガ、売レマセンデシタ。

(41-43 b)はそれぞれ非文となっている。(a)が文法的であることから、(b)では副詞が動詞に対して何らかの影響を及ぼしたと考えられる。その理由として次のように考えられる。程度・様態を表す副詞は修飾する行為・動作がなされたということを前提とする。それは行為・動作がどのように行なわれたかという情報を提供するのであり、それゆえ行為・動作が行なわれたということは事実として動かせないものであるからだ。次の(44 a)は(44 b)を含意しないことから明らかである。

- (44) a. 太郎ハ早ク走ラナカッタ。
 b. 太郎ハ走ラナカッタ。

この点で程度・様態の副詞は動作の結果に重点を置いていると思われる。しかしながら、この種のすべての副詞が「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文の前半部に生じることができないというわけではないようだ。

- (45) a. 走ッタケレド、走レナカッタ。
 b. 懸命ニ走ッタケレド、走レナカッタ。
 (46) a. 町ノ特産品ヲ売リマシタガ、売レマセンデシタ。
 b. 町ノ特産品ヲ頑張ッテ売リマシタガ、売レマセンデシタ。
 (47) a. 単語ヲ覚えマシタガ、覚えラレマセンデシタ。
 b. 単語ヲ熱心ニ覚えマシタガ、覚えラレマセンデシタ。

(45-47 b)が容認されることからそれぞれの副詞は動詞に他動性に関する影響を何ら与えていないと考えてよい。ここで使われている動詞は Activity Verb であり、副詞によっても他動性が高くなり、(b)文が容認されているのである。上の3つの副詞は

その行動がなされている過程の様態だけに言及しており、結果については何ら関与していないようである。この点が(41-43)で使われている副詞と異なり、容認性の違いに表れているのである。

さて、量・程度・様態の副詞が及ぼす影響を action/goal-oriented の観点から考えられないだろうか。量の副詞は〈all〉を含意すれば動詞の他動性が高くなると判断された。すなわち、すべての対象物に対し行為が遂行されたと解釈された。〈all〉を含意しない場合はすべての対象物に対し行為が遂行されたとは言えず、まだ行為が及んでいない対象物が存在する。この点から前者の副詞は goal-oriented の素性を、後者の副詞は action-oriented のそれをそれぞれ動詞に付与するものであると考えられる。程度・様態の副詞でも同じように考えられないだろうか。(41-43)で使われているような行為の結果を問題にする副詞と、(45-47)で使われているような行為の過程を問題にする副詞にも同じように action/goal-oriented に関して区別することができるのではない。つまり、前者は goal-oriented の素性を、後者は action-oriented の素性をそれぞれ動詞に付与するのである。これらの結果は2.2や2.3で見えてきた結果と矛盾しないものである。すなわち、goal-oriented の素性を持つ要素が「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文の前半部に存在する場合は非文になり、action-oriented の要素が前半部に存在する場合は容認可能である。

2・5 目的語に関して

このセクションでは目的語の違いによって文法性が異なってくるか否かについて考えていきたい。Ikegami (1985: 297)によると動詞「沸カス」を使った構文では次のような容認性の違いがあるとしている。

- (48) a. 沸カシタケレド、沸カナカッタ。
 b. 水ヲ沸カシタケレド、沸カナカッタ。
 c. ??湯ヲ沸カシタケレド、沸カナカッタ⁴⁾。

「湯ヲ沸カシタ」という方が無標的な表現であるが、「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文では(48 b)の方が(48 c)よりも容認性が高いのである。これは「水」は「沸カス」に行為未達成の意味を持たせるのに対し、「湯」はすでに行為が達成されたことを意味する。すなわち、「水」は動詞「沸カス」に対して action-oriented であるのに対し、「湯」は

goal-orientedである。よって(48c)では「湯ヲ沸カシタ」という達成された行為を否定しているため容認性が低く、(48b)では「水ヲ沸カシタ」という未達成の行為であるため、その否定が可能なのである。次の例をみてみよう。

- (49) a. 炊イタケレド、炊ケナカッタ。
 b. 米ヲ炊イタケレド、炊ケナカッタ。
 c. ?御飯ヲ炊イタケレド、炊ケナカッタ。

ここでも「米」は動詞「炊ク」にその行為が達成されていないニュアンスを与えるのに対し、「御飯」は出来上がった状態であるため、「御飯ヲ炊イタ」は既に「炊ク」という行為が終了してしまったという意味を持たせる。言い換えれば、「米」はaction-orientedであり、「御飯」はgoal-orientedなのである。よって、(49b)では否定が後続することが可能であるが、(49c)ではやや容認性が低くなると判断できる。

さて、次の例を見てみよう。

- (50) a. 専門書ヲ読ミマシタガ、読メマセンデシタ。
 b. ?/レ新聞ヲ読ミマシタガ、読メマセンデシタ。
 c. ?/ヒラガナヲ読ミマシタガ、読メマセンデシタ。

(50a)は完全に文法的であり、(50b)、(50c)はやや容認性が低いと判断された。この理由として次のことが考えられる。一般に「専門書」とは難しいものという認識がある。一方、「新聞」は誰でも読め、さらに、「ヒラガナ」となるとよほどのことがない限り読めなければおかしいと思われる。すなわち、行為の遂行が困難さを伴う場合は、「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文が可能であるが、非常に容易な場合には容認性が低くなると考えられる。次の例でも同じことが言える。

- (51) a. マラソンヲ走りマシタガ、走レマセンデシタ。
 b. 100メートル競争デ走りマシタガ、走レマセンデシタ。
 c. ?/レ5メートル走りマシタガ、走レマセンデシタ。

通常の認識では「マラソン」はそう簡単には完走できないものであり、また「100メートル競争」は競技の性質上速く走らなければならないものであるた

め、「走ッタガ、思ッタホド速ク走レナカッタ」という意味が生じてくる。よって、(51a)及び(51b)は適格な文であると判断される。一方、「5メートル走ル」ことは通常それ程の困難さは伴わない。この点で「5メートル走りマシタ」を否定して行為達成の意味合いを中立に戻すことはやや無理なようである。

action/goal-orientedの観点から考えると〈困難さ〉は到達・達成を妨げようとするものであり、action-orientedと言えるだろう。一方、〈容易さ〉は到達・達成を妨げる要因が少なく、goal-orientedの性格を持つと言える。これは(48)-(49)で見た結果と一致する。つまり、「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文の前半部にaction-orientedの性格を持つ要素がある場合は文法的に容認されるが、goal-orientedの要素が存在する場合は容認可能性が低くなる。

さて、ここで考えなければならないのは〈困難さ〉の基準である。どの程度までの困難さが「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文として適格になるのか。どの程度からの容易さによって非文となってくるのだろうか。「リンゴヲ切ル」ことは常識から言っ

3. まとめ

2の考察によって「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文に関して次の制約が働いていることが明らかになった。

- (52) (a), (b)かつ/あるいは(c)ならば
 *「切りマシタガ、切レマセンデシタ」
 a. 前半節の主語が [-human]
 b. 動詞が [-intention and/or -activity]
 c. その他の前半節の要素が [goal-oriented]

さて、(52)に関して余剰的なところがあるようだ。主語が [+human] なら動詞は [+intention] というわけではないが、動詞が [+intention] ならば主語は必ず [+human] である。よって(a)は削除したほうがよいだろう。ところで、動詞 [-activity] という素性は(c)の [goal-oriented] に含めてもよさそうであるが、すでに見てきたように動詞には[Stative]が存在し、(c)だけではActivity Verbだけを生起させることはできない。以上の点から(52)を(53)に修正することにする。

- (53) (a) かつ/あるいは(b)ならば
 *「切りマシタガ、切レマセンデシタ」
 a. 動詞が [-intention and/or -activity]
 b. その他の前半節の要素が [goal-oriented]

さて、本論では項の省略について扱うことができなかった。項の省略は特徴的な日英語の違いである。主語・目的語の省略は日本語では頻繁に起こることであるが、英語では文法上の制約が強く日本語の場合ほど省略はなされない。この観点から考えると日本語の他動性の低さと英語の他動性の高さの説明がつかのかもしれない。本論で得た結果とともに今後の研究対象となろう。

注

- 1) 池上 (1989) によると英語動詞より日本語動詞の方が他動性が高いという例は今のところ見つかっていない。
- 2) Station Verb については〔F〕に関して無関係であるため、「切りマシタガ、切レマセンデシタ」構文に生じないことは明白である。
- 3) 複合動詞には複合上の統語の違いから連用形複合動詞とテ形複合動詞に分類されるが、本論で扱うテーマとは直接関係ないため言及しない。
- 4) 原文はローマ字表記であるが、本論では便宜上表記を変更する。

参考文献

Ikegami, Y. (1985) 'ACTIVITY-ACCOMPLISHMENT-ACHIEVEMENT-A LANGUAGE THAT CAN'T SAY 'I BURNED IT, BUT IT DIDN'T BURN' AND ONE THAT

- CAN.' in (eds) Makkai & Melby. Linguistics and Philosophy. Amsterdam.
- 池上嘉彦 (1988) “動詞の意味構造の類型規定のための試み,” 寺沢芳雄・竹林滋編 英語語彙の諸相, 研究社
- (1989) “名詞的なものと動詞的なもの,” 言語9月号.
- (1991) 英文法を考える, 筑摩書房.
- Hofmann Th.R. & T. Kageyama (1986) 10 Voyages in the Realms of Meaning, くろしお出版
- 金田一春彦 (ed.) (1988) 日本語大事典, 大修館.
- 国広哲弥 (1989) “文法にも慣用表現がある,” 言語2月号.
- 益岡隆志&田窪行則 (1989) 基礎日本語文法, くろしお出版.
- 小田朗美 (1989) “日英複合動詞の形式的・意味的特徴及び発想について,” ノートルダム清心女子大学紀要, Vol. 13 No. 1.
- (1991) “「切りましたが、切れませんでした」構文と対応英語構文の動詞の意味的・統語的特徴について,” ノートルダム清心女子大学紀要, Vol. 15 No. 1
- Palmer, F.R. (1988) The English Verb, 2nd ed. New York: Longman.
- 柴谷方良, 景山太郎&田守育啓 (1992) 言語の構造—意味・統語編, 10th et. くろしお出版.
- Vendler, Z. (1967) Linguistics and Philosophy, Ithaca: Cornell University Press.
- 山本恭弘 (1992) “他動詞・自動詞の日英語比較,” 英語教育3月号, 大修館.